学校法人
学びのさと自由が丘学園

まおい学びのさと小学校

開校から半年以上が経ちました。**「まずは子どもを幸福にしよう」**これを実現するために、関わる大人たち（学校スタッフ・保護者）みんなで、改めてまおい小の教育を一緒に考えていきたいと思っています。
学校と保護者の方向性が一致していることが最も大切なことです。

【学校の理念】 本校の教育を支える考えです。2つのモットーを大切にしています。

〇まずは子どもを幸福にしよう。すべては そのあとに続く。（A.S ニイル：イギリスの教育実践家）

〇1オンスの経験は 1トンの理論にまさる。（ジョン・デューイ：アメリカの教育学者）

【教育目標】 理念を実現するために 私たちは 次の3つの自由を尊重します。

感情の自由	感情面を開放し、五感を全開にして豊かな感性を育みたい
知性の自由	知的好奇心を生かし、この世界についての知、人生の知を豊かに育みたい
人間関係の自由	多様性を認め、多様性から学ぶ、寛容で豊かな人間関係を育みたい

この教育目標は、ニイルの教育実践をもとに考えられています。
「子どもは、愛され自由であるなら、善良で正直な人間になる。」
「不自由な教育を受ければ、人生を存分に生き抜くことができない。そのような教育は、生命の感情的側面を完全に無視する。――――現代の教育が対象としているのは頭だけである。しかし感情面が自由であるなら、知性はひとりでに発達するだろう。」（A. S ニイル：『自由な子ども』より）
特に、感情面を開放させること、つまり子どもが何も恐れず、自分は自分でいいんだと思えることが重要と考えています。そうすることが、本当の意味での知性を育み、豊かな人間関係を築く力を育む最善の方法と考えているからです。

【体験的な学び】本校の主たる教育内容です。教科教育ではなく、体験から学ぶことを重視します。

体験学習を中心とした学びは、ジョン・デューイの下記のような理論や実践をもとに考えられています。

・学校は社会的制度の1つである。簡単に言えば、コミュニティ生活の1つの形である。教育は将来の準備ではなく、人生のプロセスである。人々が生きることと無関係に教科が配置されるべきではない。それぞれの教科の内容を結びつけた、相互関係を構築する必要がある。こうした相互関係を形成するのは、子どもの表現的活動と構築的活動に支えられた、子ども自身の社会的活動である。**→これがプロジェクト学習の考えにつながります。**
・シカゴ大学実験学校（デューイ設立）では「仕事」を取り入れた。工作室作業や調理や裁縫、織物作業など。人間は、自然や実際の物、素材にじかに触れることでそれらがどうやって扱われ、社会のなかでどのように必要とされ、活用されているかを理解することになる。観察力、創意工夫して何かを構想する創造力、論理的思考力、直接触れることによって得られる現実感覚をはぐくむ。**→実際に作業を通して体験することを重視する根拠となります。**
・活動的な作業が行われている場合、自由なコミュニケーションの精神、つまりさまざまな意見や、提案や成果、そして経験した成功や失敗を、互いに交流するという精神が授業にみなぎる。対話し、制作し、探究し、表現することの興味は、子どもの成長にとって不可欠である。

【自由な教育とは？】 感情面を開放し、子どもを幸せにするためにスタッフが大切にしていること

開校から半年、子どもたちと過ごす中で、改めて理論を学び直していくと見えてくることがたくさんありました。ニイルの教育実践記録の中で述べられていた子どもたちの様子や特徴、変化の過程とまおい小の子どもたちの様子には、国や時代が異なっても、共通することがたくさんありました。

子どもたちのどんな言動にも意味がある。表面に現れていることだけに目を向けず、その背景に何があるのかを考え、関わっていくことが私たち大人にとって一番重要な仕事です。

本当に子どもを幸せにするために最も大切なことは、学校のスタッフも保護者の方も同じ方向を向いて、子どもたちと向き合っていくこと。そのために A.S ニイルの理論をもとにしている学校の方針を改めて、知ってほしいと思っています。

①ただ子どもを認め・信じること　　の部分は、根拠としているニイルの理論

・「自分は自分の生き方を。人には人の生き方を」というモットーは 子どもたちが自分自身であるという自由を認められた時にもっとも良く実現される。
・認めてもらうことこそ子どもが求めるすべて。
・愛によらないで救われた子どもは１人もいない。どんな子どもでも愛と承認を必要としている。
・自由な子はあまり憎しみを抱かない。憎しみは憎しみを育て、愛は愛を育てる。愛とは味方になること、つまり認めてやること。これこそこの学校で欠くことのできない大切なもの。
・愛とはただ情緒的に好きだということではない。賞賛し、認め、受容すること。ホーマーレーンの言葉で言えば「味方」になること。自分は自分でいいんだという自由。

②指示・忠告・道徳教育などいわゆる「しつけ」をしない

「早くしなさい」「いい加減にしなさい」「やめなさい」「時間を守りなさい」「思いやりのある行動をしなさい」「座って聞きなさい」などの言葉で子どもたちにしつけることはしないようにする。

ただし、人として対等な立場で、やめてほしいこと、嫌だという気持ちは伝える。「耳元で大きな声を出されるとびっくりするからやめてほしい。」「それは、大切にしているものだから、勝手に触らないでほしい」「今、大切な話をしているからこの部屋には入らないでほしい」など。

・そもそも指示・忠告・教育できる権利は大人にはない。なぜなら大人と子どもは対等な立場だから。
・教師は子どもに何をしたらよいか助言はしない。ただ、どのようにしたらよいのかの技術的な情報を求められた時に援助するだけ。
・甘やかされて育った子どもは最初の１年間は家でも野蛮人のように振る舞う。マナーをうるさく言って育てられた子どもは機会さえあれば野蛮な行動へと退行する。それはそういうマナーが心の中に少しも根付いていない証拠である。
・しつけには、つねに恐怖が含まれている。しつけは憎しみの行為であり、その犠牲者を憎しみの人間にする。
・しつけが支配している学校では、生徒は弱い者いじめをしたり、暴力を振るったりするようになる。
そういった学校で抑圧された時期が長いほど、反社会的な言動や表裏のある態度、厚かましさをなくすのにもっとも長い時間がかかる。自由がなんであるかを知るために長い時間がかかる。

③マナーの指導はしない

「きれいに食べましょう、早く食べよう、座って食べましょう、時間内に食べましょう」などの食事のマナーのような細かな指導はしない。好きな時間に好きな場所で、好きな人とあるいは一人で食べればいい。

「ありがとうを言いましょう」「お礼を言いましょう」などを大人から言わない。表面的なだけのマナーを大切にしない。自分自身である自由を認め続けることで、寛容な人に育ち、誰にでもやさしくなれる。そうすれば、表面的なマナーではない振る舞いが身につく。

・食事はとても大事な本能行為であり、子どもたちはまずお腹をいっぱいにすること。テーブルマナーは少し遅れて身についてくる。強制したり励ましたりしなくてもいつの間にか生まれてくる。
・テーブルマナーでうるさくいう親（大人）は食べ物についてのコンプレックスを与えているにすぎない。 子どもは大人と同じように食べ物を自由に選べるようにしてやらねばならない。嫌いなものを食べるように無理強いしてはならない。大事にしているのは食べ物ではない、子どもなのだ。
・テーブルマナーの悪い子は、躾をうるさく言われて育った子。どんなマナーも同じだ。
・マナーは無意識、他人のことを考える、思いやる心、誠実さ。
・人懐っこいのは良いマナーのひとつ。
・私の学校では、道徳訓練もなければ、大人が子どもを罰することもない。恐怖もないし、性格を型にはめたりもしない。子どもたちには「自分自身である自由」がある。彼らは大きくなるにつれて賢明で寛容になり、だれにたいしてもやさしくなる。

④プロジェクトや基礎学習、よりどりへの参加の自由を認める

やりたくないことは強制はしない。やりたくない気分のときは、休んでいてもいい。

ただし、他の人の「やりたい」という自由を侵害する行動は認めない。

「みんなで決めたルールを守らずに場を壊す」「走り回って作業の邪魔をする」「学ぼうとする人のたちの近くで大騒ぎして集中できない状態をあえて作る」 など

・知性ではなくて、情動こそが私たちの行動の推進力である。創造は無意識に属する。もし私たちが自分自身であろうとするなら、無意識はみずからを表出するためのすべての自由を与えられなければならない。教科の学習をする制度のもとでは、無意識はいつまでも原始的なままに残される。頭は発達するが、心は衰弱する。
・転入生は、授業に出ようとしない。この回復期の長さはこれまでの学校が彼らに与えた嫌悪感の強さに比例する。平均 ３ヶ月、最長３年。
・学業が遅れている子で創造的な能力が欠けている子は誰１人としていない。学業の進み具合で子供を判定するのは致命的な間違い。優等生の方が創造性に欠ける。

⑤自由と放任の違いについて理解できるようにする。

『自由』は『わがまま放題を許す』いう意味ではないことを伝え続ける。

・自由とわがままはちがう。子どもは立場を考えて行動すべきである。そして、他人の権利を尊重するように教えられねばならない。しかし、お説教や罰によってではなく、オープンなぶつかり合いによってでなくてはならない。
・好きなようにしてよいのは、自分に関する事。しかも自分だけに関わる事。
・しつけの厳しい家庭では、子どもは全く権利をもってない。甘やかす家庭では子どもは全ての権利をもっている。正しい家庭は、子どもと大人が対等の権利をもっている。

⑥物の管理に関する指導を徹底しすぎない。

「しまっておいてほしい」「使ったら戻してね」「大切に使ってね」ということは、必要に応じて伝えるが、それが徹底できていなくても、できるまでしつこく言う、できていないからと叱責しない。伝えるだけ。

・子どもというのは物には関心がない。子どもたちはわざと壊すわけでない、むしろ無意識に壊してしまう。15 歳を過ぎると整理整頓できるようになる。8 歳までの子もきちんとしているのが好き。
・大人は物にこだわるが、子どもはそうではない。
・子どもは生まれつき不注意な存在。
・大切にするように強制すると、子ども時代特有の遊びの生活がどうしても犠牲にされてしまう。どんな物に向かう時にも、自由意志と自由選択に任せる。思春期以前に特有の物に無頓着な時期を過ぎると自然にものを大切にするようになる。
・創造の中に私たち（大人）の大事にしているものの破壊が含まれているとすれば、結局は笑って耐えるほかない。ものを壊すのを未然に防ぐには恐怖を持ち込むほかない。

⑦怒らない・叱らない。

やめてほしいことは伝えるが、暴力や恐怖を与えることで子どもたちの行動をコントロールしようとしない。「怒られた」という事実だけしか心に残らず、怒った相手を憎むようになり、それが意識的あるいは無意識的な形で子どもたちのいわゆる「問題行動」として現れると考えるから。

・大人の理想を押しつけられ、それにそぐわなければ、説教されたり肉体的苦痛を与えられたりする。幼少の頃からこのように育てられた子どもの内心には、癒し難い挫折感が定着してしまう。自信を失い、罪の意識に苛まれる。そして必然的に自己を否定し、否定された自分を憎む。この憎しみは自分に向けられれば自罰行為になり、他人に投影されれば、辛辣な皮肉や肉体的攻撃になる。一言で言えば、理想の押し付けと、その結果として生じる抜き差しならぬ自己否定の感情が子どもを心の奥深いところで苦しめる。
・自由学校の子どもの内心には、自己憎悪が少ない。なぜなら、「今のままの君でいいんだよ」「無理しなくていいんだよ」というメッセージを与え続けてくれる親や教師がいるから。こう言ってもらえる子どもは、自信をもって前進する。そして自分を肯定して、他人を肯定するようになる。 肯定的に認めてもらえる子どもは、自分が好きな幸福な子どもである。そして、自分が好きな人だけが、他人を本当に好きになれるだろう。
・自由の子はそうやすやすと人から影響を受けたりしない。それは恐怖心が欠如しているから。
恐怖心の欠如こそ最も素晴らしい。
・子供たちのウソのほとんどは恐怖のためにつく嘘。

⑧危険な行為については放っておかない。

危険から子どもたちを守るのは大人の役割と考える。命に関わるような行為については、すぐに止める。
単独による危険な行動であったり、相手を大きく傷つける言動であったりする場合も同じ対応とする。

・子どもにはまだ無理なことまで責任を負わせてはならない。ただし、子どもが出会う危険の半分は間違った教育が原因。危険な火の扱いをするのは、火とは何かを体験を通して知るのを禁止された子。
子どもに火とは何かを知らせるにはほんのちょっとやけどをすればすむこと。

◎まとめとして

・実際のまおい小の子どもたちの姿として

○ 開校当初、特に2年生以上の子どもたちに顕著に見られた姿は、「乱暴な言動」「物を壊す」「相手の話を聞かない」「怒られると思うと逃げる」「他者への暴力行為」「自由とわがままの混同」というものでした。表面的に見れば、「問題行動」ですが、その裏側には、今までたくさんの一方的なルールに縛られ、何かあれば叱責されるという経験がたくさんあったからこその行動と考えられます。1年生は、「この自由な形が当たり前」という中でスタートしているので、そういった言動もほとんど見られず、相手を認める言動をする子が多かったのも事実です。

→ **たくさんの破壊的な行動を経て、今は子どもたちの様子も変わってきています。大人が止めるべき行動ももちろんありましたが、経るべき期間を通って、現在の姿があると思っています。**

○ 物の管理についても、大人が何度声をかけても、自分たちで話し合ってルールを作ってもそこに関しては大きな変化はありません。靴箱の靴は、やはり出したままだし、図書室の本も読んだらその辺に投げ捨てていきます。物にこだわるのは大人だけ。声はかけるけれど、どうしても気になるときは、大人が片付けています。でも、靴がなくて困ったという経験をたくさんした子の中には、靴箱に入れるようになった子もいます。大人が図書室を片付けていると気づいて、一緒に作業をする子（4年生が多いです）もいます。少しずつそれぞれの発達段階を経て変化していくのだと改めて感じています。

子どもたちは、今を全力で生きています。将来がどう・・ということは、子どもたちには関係ないのです。自由な教育を受け、本来の姿で生活する子どもたちは、それぞれの発達段階に応じて少しずつ成長していきます。早く大人になれ と大人が強制するような態度をとることは間違っています。

小学校卒業時までに、完全に成長することも求めてはいけないと思っています。中学校卒業時にもわかりやすく何かが見えるわけではないかもしれません。目に見える『結果』を早く求めようとすることも大人はしない覚悟が必要です。いくつになっても人は、成熟に向かうもの。人生を全うするまで歩みは止まりません。

自分自身を肯定することができるようになった子どもたちは、他者を尊重し、あらゆるできごとも自分の目で見て、自分の頭で考えて判断できる、本当の意味で「自分の意思で生きることのできる大人になっていく」と信じて、今関わっていくのが大人の役割です。